

ゲルマン語強変化動詞第1種の歴史的変遷 (1)

下寄 正利

ゲルマン語の強変化動詞は、その語幹形成の点においても、そこに属している語彙の点においても、各言語において様々な変遷を経ている。これらに関してはもちろん、比較言語学的な研究も、個別言語的・歴史言語学的な研究もなされているが、それらを総合し全体を俯瞰する作業、すなわち各言語の現在に至るまでの通時態の対照研究は未だ試みられていない。そこで本稿では、強変化動詞の内第1種を取り上げ、語幹形成法と語彙の点で、各言語がどのような史的変遷を辿っているのか、この動詞クラスがどの程度分散的あるいは収束的な発展を遂げているのかを示してみたい。

1.0. ゲルマン祖語

ゲルマン祖語における強変化動詞第1種のアプラウトは、わずかながら存在しているアオリスト現在形を持つ動詞を除き、ei-ai-i-i (現在語幹, 過去単数語幹, 過去複数語幹, 過去分詞の語幹の順) である。これは起源的にはアプラウトを行うeの後にiが続く音連続に由来し、インド・ヨーロッパ祖語のe-o-o-0というアプラウトをそのまま引き継いだものである。現在語幹のeiは、すべての言語でiに変化する。

文法的交替も規則的で、それが起こりうる動詞にあっては、現在語幹と過去単数語幹で無声摩擦音、過去複数語幹と過去分詞の語幹で有声摩擦音が現れた。

語幹頭子音や語幹末子音が後続母音の影響で変化を被ることも無かった。

現在語幹形成要素については、-n-を持つ動詞が十数語存在していたが、この-n-は現在語幹以外の語幹にも入り込み、すべての語幹に固定化する方向に向かっていた。

このゲルマン祖語における語幹形成法は、その後各言語において様々な変化を被るわけだが、まず、各言語の文献時代の初期にいてどのような動詞が強変化動詞第1種に属しており、語幹形成法がどのようなものであったかを見てみることにする。取り上げる言語は、ゴート語、古アイスランド語 (西ノルド語を代表する言語として)、古スウェーデン語 (東ノルド語を代表する言語として)、古高ドイツ語、古ザクセン語、古英語、古フリジア語とする。古オランダ語は、資料上の制約が大きいため、取り上げない。オランダ語については、中期オランダ語以降の記述となる。

1. 1. ゴート語

アクセントの有る germ. ai は、ゴート語では ái になる¹。germ. i は、h, hu, r の前では ái に変化するが、その他の音環境では i のまま保持される。これらの音変化の結果、ゴート語の強変化動詞第1種のアプラウトは、語幹が h, hu, r で終わっていない時は ei - ái - i - i、これらの子音で終わっている時は ei - ái - ai - ai となる。

ei - ái - i - i というアプラウトを行う動詞には、次のものがある²。

beidan, beitan, dreiban, greipan, hneiwán, keinán, -leiþán, -reisan, skeinán,
-skreitan, -smeitan, sneiþán, speiwan, steigan, sweiban, weipán, -weitan

もしゴート語カレンダーに出てくる bilaif が動詞であるならば、更に (bi-) leiban がここに加わることになる。

マルコによる福音書第6章第19節の naiswor は、neiwán の直説法過去3人称単数形 naiw の書き間違えであるとする説があるが、おそらくそうではなく、swaran の直説法過去3人称単数形の swor を含んだ形であろう³。

hneiwán はゲルマン祖語の形が *hneigwan であり、gw が w として現れている。他のゲルマン語では *hneigwan の gw は g (> g) へと発展している。

germ. *keinán の -n- は、本来現在語幹形成要素であるが、ゴート語以外の言語では、-n- がすべての語幹に入り込み固定化し、もはや現在語幹形成要素ではなくなっている。それに対しゴート語の (-)keinen では、まだ現在語幹形成要素としての振舞が見られ、唯一残されている過去分詞 uskijanata (ルカによる福音書第8章第6節) では -n- が現れていない。しかしながらそのゴート語においても、-n- は常に現在語幹形成要素として意識されているわけではない。(-)keinán の強変化過去形は残されていないが、uskeinoda (ルカによる福音書第8章第8節) という弱変化第4種の変化をした過去形が1例見られる。これは、uskeinán が起動相的な意味を持ち、語幹が n で終わっていることから行われた類推的語形形成であるが、ここでは -n- に対して現在語幹形成要素という解釈はなされていない。

ei - ái - ai - ai というアプラウトを行う動詞には、次のものがある。

leihuan, -teiþan, þeiþan, þreiþan, weiþan

¹ 以降、特に断っていない限り、母音の変化はアクセントの有る音節のものとする。

² ゲルマン祖語の形のアルファベット順で配列している。以下同様。

³ Braune/Heidermanns (2004), §172, Anm.3 を参照のこと。

þeiħan と þreiħan は、強変化第3種から移行してきたものである (þeiħan < *þinħan < *þenħan, þreiħan < *þrinħan < *þrenħan)。他の言語では、ゲルマン祖語の *þrenħan は、強変化第3種のままであり、文法的交替が g の方に統一されている。

digan はアオリスト現在形を持ち、現在語幹の幹母音は i である。現在語幹を持つ形態としては、ローマ人への手紙第9章第20節に digandin という現在分詞が1例残されている。ゴートには digan の他、もう1語アオリスト現在形を持つ動詞が存在していた可能性がある。ローマ人への手紙第7章第23節に andwaihando という現在分詞が出てくる。この動詞の現在語幹を持った形態は、この1例しか残されていない。この動詞は直説法過去3人称単数形が andwaih なので強変化動詞第1種であることは確実である。よって andwaihando が書き間違えでなければ、andwaiħan というアオリスト現在形を持った動詞が存在していたことになる。しかしここで問題となるのが、接頭辞を持たない weiħan が標準階梯の現在語幹を持っていることである。andwaihando が andweiħando の書き間違えであるとは断定できないが、もし andwaihando という綴りが正しいとしたら、同一言語内で標準階梯の weiħan と消失階梯の waiħan が併存していたことになる。

ゴート語では、文法的交替は、すべて無声摩擦音の方に統一する形で排除されている。

1. 2. 古アイスランド語

古アイスランド語では、germ. ai はたいてい ei になる。germ. g が語末において無声化し生じた h の前では é となる⁴。よって、語幹が g で終わっていない動詞のアプラウトは、基本的に i - ei - i - i である。

このアプラウトを行う動詞には、次のものがある⁵。

bíta, blikia, drífa, dríta, físa, gína, grípa, hníta, hrífa, hrína (einwirken), hrína (schreien), hvína, klífa, líða, ríða (reiten), rífa, rísa, rísta, síða, skína, skíta, skríða, slíta, sníða, svífa (aufhören), svífa (herumschweifen), svíkia, svíða, þrífa, víkia, líta, ríta, ríða (winden)

líða, síða, sníða, svífa, svíða には弱変化第1種の過去形も併存している。

⁴ この他、例外的な変化として、germ. ai は germ. h, r の前では á に、germ. w の前では、w-ウムラウトによる変化を受けていない場合には、æ になる。

⁵ 古アイスランド語には、germ. *weiħan は存在しておらず、代わって強変化動詞第5種の vega が存在している。

germ. fも germ. þも、語頭にある場合及び無声子音と隣接している場合を除き有声化するので、語幹がこれらの子音で終わっている動詞では、文法的交替が失われることになる。文法的交替が問題となってくるのは、語幹がsに終わっている動詞、すなわち *físa* と *rísa* ということになる。*físa* は、過去複数形と過去分詞が残されていないので、文法的交替がどのようになったか不明である。*rísa* では、語幹末子音がsに統一されている。

語幹がkで終わる動詞は、kの後にiやvを生じる⁶。

blikia/blíka – (用例無し) – blikom – (用例無し)
svíkia/svíkva/sýkva – sveik/sveyk – svikom – svikenn/svikvenn/sykenn
víkia/víkva/výkva/ýkva⁷ – veik/veyk – vikom – vikenn/ykvenn

iは現在語幹でしか生じないが、vは現在語幹の他、過去分詞の語幹でも生じることがある。vが生じた場合は、w-ウムラウトを起こしている形態も形成されている。過去単数語幹では、vそのものは消失しているものの、w-ウムラウトを示す形態がわずかながら見られる。

語幹がgに終わっている場合、アプラウトはi-é-i-iというパターンになる。直説法過去単数形でh < gは、1人称と3人称では消失、2人称では語尾と融合し-ttとなる。i-é-i-iというアプラウトを行う動詞には、次のものがある。

hníga, míga, síga, stíga

過去単数語幹には、音韻法則に則って作られた-éという形のものと共に、類推的に作られた-eigという形のものも存在している。hnígaの場合、更にhnéとhneigが混淆したhnégという形もある。またこのhnígaには、まれに弱変化第1種の過去形も見られる。

北・西ゲルマン語において、germ. uはa-ウムラウトによりoになるが、germ. iがa-ウムラウトによりeになっている例はごく少数である。bíðaの過去分詞においては、このa-ウムラウトによるiからeへの変化が起こっている。

bíða – beið – biðom – beðet

⁶ 変化形は、不定詞、直説法過去1人称単数形、直説法過去1人称複数形、過去分詞強変化男性単数主格形の順であげる。過去分詞に中性形しかない場合は、中性形をあげる。

⁷ 古ノルウェー語では普通víkaである。Noreen (1970), §483を参照のこと。

germ. *speiwan は、古アイスランド語では spýia という形になり、強変化動詞第2種に近い特殊なアブラウトを行う⁸。

spýia – spíó – spíóm – (用例無し)

現在語幹のýはw-ウムラウトによるものである。母音の直後にwが続いている場合、w-ウムラウトは、先行母音が長く、wがその母音と同一音節に属す場合にしか起こらないので、本来ýは直説法現在単数形および命令法単数形に限定されていたのだが、平均化により現在語幹を持つすべての形態の幹母音がýに統一されている。過去単数語幹のspíóは、-æiwが-æwとなり⁹、更にこれがióへと変化したことにより形成された形態である¹⁰。その後、平均化によりこの語幹は過去複数語幹でも用いられるようになり、上記のウムラウトが形成されることになる。

sveipa は、普通弱変化第1種もしくは弱変化第2種の変化をするが、本来は強変化動詞第7種であり、実際、強変化の例も残されている。強変化動詞として用いられた場合、この動詞の過去形は、予想される*svép – *svépomではなく、強変化動詞第1種と同じくsveip – sviponとなる。語根重複過去形から新たな1音節語幹の過去形が形成される際、北ゲルマン語では、一般化はしなかったが、畳音を落として1音節にするという方法が試みられた。過去単数形のsveipは、その名残である¹¹。過去複数形のsvipomは、このsveipから強変化動詞第1種への類推により形成された形態である。

かつて強変化動詞第1種として存在していた動詞の中には、その痕跡を残しているものがいくつかある。

hnipa は弱変化動詞第1種に移行しているが、過去分詞のhnipennが残されている。

strýkva (ýはw-ウムラウトによる) も弱変化動詞第1種に移行しているが、過去分詞にstrýkvennという別形が見られる。これは弱変化のstrýktrと強変化の*strykvenn (yはw-ウムラウトによる) の混淆形態であろう。

germ. *sneiwan は、sniórから派生した弱変化動詞第2種のsniófaに取って代わられているが、直説法現在3人称単数形のsnýr (ýはw-ウムラウトによる) と過去分詞のsnivennが残されている。

⁸ 同書§488では、spýiaは強変化動詞第2種に分類されている。

⁹ この変化については、註3を参照のこと。

¹⁰ *spæiwは、w-ウムラウトにより*spøyとなったが、後に類推により*spæiwという形が復活し、ここからこの発展が起こる。

¹¹ Mottausch (1998), 44頁, 47-54頁を参照のこと。

liá < germ. *leihwan も弱変化に移行しているが¹²、直説法現在1人称単数形の lé と過去分詞の強変化男性複数主格形の lénir が、かつて強変化動詞第1種であったことを伝えている。lé の é は、h の前での i の舌の位置の低下によるもので¹³、不定詞の iá は éa から変化したものである。lénir の é は、文法的交替の平均化により g が h になり、h の前での舌の位置の低下により i が e へと変化し¹⁴、更に h の消失とそれに伴う代償延長により生じたものである¹⁵。

tiá < germ. *teihan も弱変化に移行しているが¹⁶、直説法現在1人称単数形に té という形が残っている。té の é も tiá の iá も、lé 及び liá の場合と同様の音変化によるものである。tigenn (もしくは tigen) は、tiá の過去分詞が形容詞化したものであるとされることがある。この語は、第1音節の母音の長短がはっきりしないが¹⁷、もし長母音なら、その可能性は考えにくいと言わざるを得ない¹⁸。

動詞そのものは失われてしまっており、形容詞化した過去分詞のみが残されている例が数例ある。lifenn, svigenn, visenn はそれぞれ本来、germ. *leiban, *sweigan, *weisan の過去分詞である。visenn においては、文法的交替の平均化が見られる。

1. 3. 古スウェーデン語

germ. ai は古スウェーデン語では ē になる¹⁹。この変化により、古スウェーデン語における強変化動詞第1種のアプラウトは ī-ē-i-i となる²⁰。

後期古スウェーデン語では、短い語幹の i が、次音節に i, u, ī が無い場合 e に

¹² liá は iá < éa という音変化のため、特殊な変化になっている。

liá – léða – léðom – léðr

¹³ Noreen (1970), § 111, 2 を参照のこと。

¹⁴ 同書 § 110, 3 を参照のこと。

¹⁵ 同書 § 123 を参照のこと。

¹⁶ tiá も iá < éa という音変化のため、特殊な変化となっているが、tiá の場合には更に類推により形成された iá という幹母音を持つ過去形及び過去分詞が加わっている。

tiá – téða, tiáða – téðom, tiáðom – téðr, tiáðr

¹⁷ Noreen (1970), § 520, de Vries (1977), 587 頁, Feist (1939), 204 頁, Lehmann (1986), 150 頁 などでは長母音, Cleasby et al. (1993 [1957]), 629 頁, Zoëga (1981 [1910]), 435 頁 などでは短母音になっている。

¹⁸ Noreen (1970), § 520 と Feist (1939), 204 頁では、長母音を仮定しているにもかかわらず、tigenn を tiá の過去分詞としている。

¹⁹ germ. h, r, 次音節に属す germ. w が直後にある場合は例外で、germ. ai は ā になる。

²⁰ 方言によっては、現在語幹で ī に代わって ū が現れることがある。Noreen (1975 [1904]), § 527, 1 を参照のこと。また、過去単数語幹では ē に代わって æ が現れることがある。同書 § 527, 2 を参照のこと。

なる²¹。更に続いて、短い語幹において、短母音が長母音になるか語幹末子音が二重子音化するという変化が起こる。どちらの変化が起こるかは、語幹末子音が何かにより異なっており、また方言によっても異なっている²²。これらの変化により、過去分詞の語幹の形にヴァリエーションが生じることとなる。

古スウェーデン語で強変化動詞第1種に属するのは、以下の語である。

bīpa, bīta, drīva, gnīdha, grīpa, nīgha, hwīna, klīva, blīva, līpa²³, mīgha, rīpa, rīva, rīsa, rīsta, sīgha, skīna, skīta, skrīa, skrīva, skrīpa, slīta, smīpa, splīta, stīgha, strīpa, strīka, swīgha, swīka, swīpa, þrīvas, vīka, vīta, vrīpa

skrīva は、ラテン語からの借用語である²⁴。

古アイスランド語と同様、文法的交替が問題となるのは、語幹がsに終わっている動詞のみである。該当するのは、rīsaのみであるが、sに統一する形で文法的交替が平均化されている。

強変化動詞第1種に属す動詞の内、blīva, skrīa, splīta は後期古スウェーデン語期になって初めて現れるが、中低ドイツ語からの借用語である。同じく後期古スウェーデン語期になってから現れるgnīdhaも、おそらくは中低ドイツ語からの借用語であり、strīkaにもその可能性がある。後期古スウェーデン語の末期によく現れるglīdhaも中低ドイツ語から借用されたものだが、不定詞の例しか残されておらず、借用された当初から強変化動詞第1種であったかどうかは不明である。

bīpa, nīgha, rīsa, smīpa, splīta, strīpa, vīta は、弱変化第1種の変化形も示している。また、bīpa, nīgha, skrīa, skrīva, smīpa, vīta は、弱変化動詞第2種の変化形も示している（よって、bīpa, nīgha, smīpa, vīta は弱変化第1種と第2種の両方）。vītaには更に、現在形において、過去現在動詞のvītaと同じ変化形も併存している。

rīsta は、ルーン・スウェーデン語にしか見られず、前期古スウェーデン語期以降は、弱変化動詞第2種のristaに取って代わられている。spīa（もしくはspīa）は、弱変化動詞第1種である。

swīkaとvīkaにおいては、極まれにしか見られないが、古アイスランド語のようにkの後にiを伴う形も残されている。

²¹ Wessén (1970), 85-88 頁を参照のこと。

²² 同書102-105 頁を参照のこと。

²³ 本稿では、līpa (gehen)とlīpa (leiden)は同一の動詞として扱う。他の言語の対応語でも同様。

²⁴ 古高ドイツ語scrīban, 古ザクセン語scrīban, 古英語scrīfan, 古フリジア語skrīva等も同様である。

1. 4. 古高ドイツ語

古高ドイツ語において germ. ai は, germ. h, r, w の前を除いて ei に, これらの子音の前では ē になる。これにより, 語幹が germ. h, r, w で終わっていない動詞のアプラウトは ī-ei-i-i, 語幹がこれらの子音で終わっている動詞のアプラウトは ī-ē-i-i となる²⁵。ī-ei-i-i というアプラウトを行う動詞には, 次のものがある。

bītan, bīzan, blīhhan, trīban, flīzan, glīzan, gnītan, grīnan, grīfan, (h)līban, (h)nīgan, (h)rīnan, kīnan, klīban, -līban, līdan, mīdan, rītan, -rīhhan, -rīman, rīsan, sīgan, scīnan, -scīzan, scrīan, scrīban, scrītan, slīhhan, slīfan, slīzan, smīzan, snīdan, sprītan, stīgan, strītan, strīhhan, swīhhan, swīnan, wīhhan, -wīfan, wīsan, wīzan (vorwerfe), -wīzan (gehen), rīban, rīzan, -rīdan (winden), rīdan (wachsen)

ここに更に nīdan と swīdan を加えることができるかもしれないが, 残されている変化形からは判定できない²⁶。

上にあげた動詞の内, līdan, mīdan, rīsan, snīdan は文法的交替を示しているが, mīdan では過去複数形及び過去分詞で, t ではなく d を持つ形も見られる。-rīdan (winden) は, 過去複数語幹を持つ形態は残されていないが, 過去分詞は girīdan で, 文法的交替が平均化されている。rīdan (wachsen) は, 過去分詞の garīdan しか残されていないが, やはり文法的交替が d の方へと平均化されている。wīsan は現在語幹を持つ形態と過去単数語幹を持つ形態しか残されておらず, 文法的交替がどのようになっていたかは不明である。

rīsan は常に強変化であるが, girīsan の過去形は強変化形はまれで, 弱変化形の girīsta に取って代わられている。

scrīan は, 過去複数形及び過去分詞において r が挿入されることがある (scrīrum – gīscrīran)。語根重複の名残と考えられるが, 詳細は不明である。scrīan は spīwan と語幹形態が類似しているため²⁷, 語幹形成において相互に影響を及ぼし合っている。erscrīuun (= erscrīwun) という直説法過去3人称複数形が見られるが, 語幹末の w は spīwan への類推によるものである。

動詞自体は失われてしまったが, 過去分詞が形容詞として化石化して残って

²⁵ 語幹が germ. r で終わる動詞は存在していない。

²⁶ ともに現在形しか残されていない。Braune/Reiffenstein (2004) は, nīdan も swīdan も強変化動詞第1種としている (§ 330, Anm. 2)。それに対し Seebold (1970) は, nīdan を弱変化動詞としており, 中高ドイツ語の nīdan がたいてい強変化であるのは, 二次的な発展であるとしている (356-357頁)。swīdan については, 強変化動詞第1種の可能性もあるが, 他の可能性もあるとしている (487頁, 496頁)。

²⁷ これについては, 下記を参照のこと。

いるものに wēsan がある。文法的交替が平均化されており、s が現れている。また幹母音が i ではなく e であり、a-ウムラウトを示している。

i-ē-i-i というアプラウトを行う動詞には、次のものがある。

līhan, sīhan, snīwan, spīwan, zīhan, dīhan, wīhan²⁸, -rīhan (hüllen), rīhan (winden)²⁹

dīhan は強変化動詞第3種から第1種へと移行している (dīhan < *pinhan < *penhan)³⁰。

語幹が h で終わる動詞は、h ~ g (germ. h ~ germ. g) あるいは h ~ w, g (germ. hw ~ germ. gw) という文法的交替を行う。前者の文法的交替を示す動詞には次のものがある。

zīhan, dīhan, -rīhan (hüllen), -rīhan (winden)

*wīhan は過去分詞 (giwigan, irwiganēr) と現在分詞に由来する名詞 wīgant しか用例が残されておらず、wīgant では g が現れている。h を持つ形態は残されていない。後者の文法的交替を示す動詞には、līhan と sīhan がある。共に文法的交替の平均化が起こっており、līhan の過去分詞には (far-)liwan と並んで (far-)lihan, sīhan の過去分詞には (bi-)siwan, (bi-)sigan と並んで (bi-)sihan という形が見られる。

spīwan は、各語幹に複数の形態が存在している。

²⁸ 古高ドイツ語では、強変化動詞第1種の wīhan と強変化動詞第5種の -wēhan が併存している。

²⁹ Braune (2004) では、§ 331, Anm. 1 において rīhan ‘aufreihen’ という語形とその意味が、§ 331, Anm. 4 において intrīhan ‘enthüllen’ という語形とその意味があげられている。Seebold (1970) は、-rīhan (hüllen) も rīhan (winden) も祖形は *wreihan であるのに対し (565 ~ 566 頁)、aufreihen を意味する動詞は祖形が *reihan であり、別の語であって、現れるのも中高ドイツ語期以降としている (369 頁)。Splett (1993) は hüllen の意味の -rīhan と winden の意味の rīhan を同一語として扱っているが、aufreihen という意味はあげていない (747 頁)。Köbler (1993) は、rīhan の意味を reihen, winden, flechten とし (886 頁)、intrīhan の意味を enthüllen, offenbaren としている (595 頁)。

また Braune/Reiffenstein (2004), § 331, Anm. 4 では、intrīhan は j-現在形を持つ動詞であるとしている (*rihjan > *rihhen > *rīhhen > -rīhen)。Seebold (1970) はその可能性を否定している (565 頁)。やはり *rihhen > *rīhhen という変化は、音韻法則的に説明が困難と言わざるを得ないだろう。

³⁰ Braune/Reiffenstein (2004) は、līhan, wīhan も同様としている (§ 331, Anm. 5)。

spīwan, spīan, spīgan – spēo, spē, spēh – spiwum, spium, spuum
– gispiwan, pespiren

spīwanの本来の各基本形はspīwan – spēo – spiwum – gispiwanである。母音間
にあり、前の母音が長母音の時、wはしばしば脱落する³¹。長母音の後の語末の
o < germ. wも、古高ドイツ語のごく初期の段階ではまだ保持されているが、じ
きに脱落することになる³²。これらの音変化を経た後のspīwanの各基本形は
spīan – spē – spiwum – gispiwanとなるが、ここから更に新たな形態が形成され
ていく。

現在語幹では、母音連続を避けるための渡り音g [j]を伴うspīg-という形態
が加わってくる³³。過去単数語幹では、h ~ wという文法的交替を行う動詞への
類推からspēhという形態が形成される。過去複数語幹では、spīanやspēに倣い、
spi-という形態が生じる。過去複数語幹ではまた、spuw-という形態も生じて
くる。過去分詞では、語幹形態の類似したscrīanへの類推により、rを伴う
(pe-)spirenという形態が形成される。

snīwan < germ. *sneigwanの変化形は、確実にそうと言えるものは直説法現在
3人称単数形のsniuuitのみであり、その可能性のある形態を含めても、過去分
詞とされることの多いversniegun³⁴が加わるのみである。sniuuitではgerm. gwが
wとして、versniegunではgとして現れている。

1. 5. 古ザクセン語

古ザクセン語ではgerm. aiはēになる。そのため、古ザクセン語の強変化動
詞第1種のアプラウトはī-ē-i-iとなる³⁵。古ザクセン語で強変化動詞第1種
に属するのは、次の動詞である。

bīdan, bītan, blīkan, drīban, -flīhan³⁶, flītan, glīdan, glītan, grīpan, hlīdan, hnīgan,
-hnītan, hrīnan, hrītan, kīnan, -klīban, -līban, līhan, līthan, mīthan, -rīdan, rīsan,
sīgan, skīnan, scīthan, skrīan, scrīban, skrīdan, slītan, -smītan, snīdan, spīwan,

³¹ 同書の§ 110, Anm. 1を参照のこと。

³² 同書の§ 108, Anm. 2を参照のこと。

³³ 同書の§ 110, Anm. 3を参照のこと。

³⁴ ieというつづりに関しては、同書§ 32, Anm. 5を参照のこと。

³⁵ 過去単数語幹では、ごくまれにēに代わってā, eiが現れることもある。Gallée
(1993), § 388, Anm. 2を参照のこと。

³⁶ -flīhanは、直説法現在3人称単数形のgiflihidが1例残されているのみで、この形態
からは強変化動詞第1種かどうか判断できない。また、他のゲルマン語の対応語も存
在していない。しかし、中低ドイツ語のvlienが、弱変化もするものの、強変化動詞
第1種なので、ここに加えて差し支え無かろう。

stīgan, swīkan, tīhan, thīhan, wīkan, -wītan (gehen), wītan (vorwerfen), wrītan

thīhanは強変化動詞第3種から移行してきたものであるが(thīhan < *þinhan < *þenhan), 過去分詞にgithiganと並んで第3種のgithunganがまだ残っている。

文法的交替に関しては, th ~ dという交替を示すものとしてlīthan, mīthan, scīthan, snīðan, h ~ gという交替を示すものとしてthīhan, h ~ wという交替を示すものとしてlīhanがあげられる。この内, līhan, līthan, mīthanでは文法的交替の平均化が起こっており, līhanでは過去複数語幹にhが, līthanでは過去分詞の語幹にthが, mīthanでは過去単数語幹にd, 過去複数語幹にthが入り込んでいる例が見られる。rīsanは現在語幹を持つ形態と過去単数語幹を持つ形態しか残されておらず, どちらもsを示しており, 文法的交替がどのようになっていたかは不明である。

germ. *weihanは動詞としての用例は無いが, 名詞化した現在分詞のwīgandが残されている。語幹末子音は, hではなくgになっている。

1. 6. 古英語

古英語ではgerm. aiはāになる。直説法過去複数形では, 語尾の母音がo < uのため, Velarumlautによるiのio, eoへの変化が問題となってくる。次音節のo < uの影響によるiからio, eoへのVelarumlautは, どのような後続子音の前で起こるかが方言によって異なっているが, 西サクソン方言はこの音変化が古英語諸方言の中で最も限定されており, 後続子音が流音か唇音の時にしか起こらない。その西サクソン方言においては, 強変化動詞第1種の直説法過去複数形で類推によりVelarumlautが排除され, iが復活している。よって西サクソン方言の強変化動詞第1種のウムラウトは, 語幹がgerm. h, hwに終わっている動詞を除き, ī-ā-i-iとなる。西サクソン方言以外では, 直説法過去複数形で, iと並んで, あるいは専らio, eoが現れる。このパターンのアプラウトを行う動詞には, 次のものがある³⁷。

bīdan, bītan, blīcan, drīfan, drītan, dwīnan, fīgan, flītan, frīnan, gīnan, glīdan, gnīdan/cnīdan, grīþan, -grīsan, hlīdan, hnīgan, hnītan, hrīnan, hwīnan, cīnan, -clīfan, cnīdan, -cwīnan, -līfan, līþan, mīgan, mīþan, nīþan, rīnan, rīdan, rīþan, -rīsan, sīgan, sīcan, scīnan, -scītan, scrīfan, scrīþan, -slīfan, slīdan, slītan, -smītan, snīcan, snīþan, spīwan, stīgan, strīdan, strīcan, swīfan, swīcan, -swīþan, þīnan,

³⁷ Brunner (1965), §382, Anm. 1でもCampbell (2003 [1959]), § 739でもætclīþanがこのグループに属すとされているが, この動詞は現在形しか残されておらず, このグループに属すかどうかははっきりしない。Seebold (1970), 298頁を参照のこと。

þwīnan, þwītan, wīcan, -wītan (gehen), wītan (vorwerfen), wītan, wītan, wītan (winden), wītan (wachsen)

iはwの前でeo, ioになるので, spīwanの過去複数語幹と過去分詞の語幹では幹母音がeo, ioとなったはずであるが, 類推によりeo, ioは排除されてiが用いられている。

-swīpanは本来, 弱変化動詞第1種であるが, 語幹形態が強変化動詞第1種と同じであるため, 類推的にswāpという過去単数形が形成され, 弱変化形と並んで用いられている。

西サクソン方言では, -ig-がd, þ, nの前でしばしば-iになる。この変化により弱変化動詞第1種のriġnanがriīnanとなり, そのために強変化動詞第1種への類推が働き, rānという過去単数形が形成され, 弱変化形と並んで用いられている。

frīganは古英語では普通強変化動詞第3種であるが, 西サクソン方言ではこの動詞の場合もfrīnanという別形が形成され, そこから新たな過去形frān – frinon及び過去分詞frinenが形成され, 第3種の形と併用されている。

dwīnan, grioppa (下記を参照のこと), hrīnan, stīganは, ノーサンブリア方言では弱変化の形も形成されている。

語幹が直後に子音を伴わないgerm. k, germ. gで始まっている場合, 後続母音によりċ ~ c, ġ ~ gという交替が起こる。たとえば,

ġīnan – gān – *ġinon – ġinen

語幹がgerm. kで終わる場合, 音環境によりc ~ ċという交替が生じたはずであるが, 強変化動詞第1種では平均化によりċが排除され, すべての変化形でcが現れている。語幹がgerm. gで終わる場合も音環境によりg ~ ġという交替が生じたはずであるが, この場合も平均化が起こり, 直説法単数現在2・3人称形でġが現れる以外, すべてgで統一されている。

アングリア方言では, grīpan, rīpanという形と並んでgrioppa, reopanという形が用いられている。Brunner (1965), §382, Anm. 3やCampbell (2003 [1959]), § 739では, これらの形をアオリスト現在形としているが, Seebold (1970)はこれを否定し, これらの形は二次的な発展としている (257頁, 370-371頁)。なお, reopanという形からは, 類推的に, 強変化動詞第5種に倣った直説法過去複数形rāþonが形成されている。

līpan, scriþan, snīpanにおいては, þ – dという文法的交替が見られるが, scriþanでは文法的交替の平均化が起こっており, 過去分詞にscripenという形が見られる。-grīsan, mīþan, -rīsan, wīþan (winden)においては, 文法的交替が平

均化され、germ. s, germ. þの方に統一されてしまっている。wriþan (wachsen)は現在語幹を持つ形態しか残されていないが、dを伴う形態が併存している。本来弱変化動詞である-swiþanにおいては、文法的交替は見られない³⁸。

古英語においては、通例、過去単数語幹と過去複数語幹が異なる場合、両者はきちんと区別されるが、ノーサンブリア方言でstiganの変化形にすでに過去単数語幹が過去複数語幹を用いるべき領域に入り込んでいる例が出現しており、接続法過去単数形にstigeと並んでstāgeという形が見られる。

語幹末子音がgerm. h, hwの場合、これらが母音間で脱落し、約音が起こる。それにより、アプラウトのパターンは、ēo - ā - i - iとなる。このアプラウトを行う動詞には、次のものがある³⁹。

lēon, sēon, tēon, þēon, wrēon

現在形においてgerm. h, hwが母音に挟まれていない変化形では幹母音はīである。アングリア方言では、germ. h, hwは、子音の前でも脱落する。西サクソン方言では、現在語幹の幹母音のēoが強変化動詞第2種のそれと同一なため類推が働き、これらの動詞は強変化動詞第2種へと移行している。

文法的交替は、lēon, tēon, þēon, wrēonが0/h ~ gという交替を、sēonが0/h ~ wという交替を示している。iはwの前でeo, ioになるため、sēonの過去分詞は-seowenとなるが、類推的にiを復元したsiwenという形も用いられている。また、約音を起こした-sēonという形も存在している。

þēon, wrēonにおいては、文法的交替の平均化が起こっており、þēonではgが過去単数語幹に、wrēonではgが現在語幹と過去単数語幹に入り込んでいる例が見られる。germ. *weihanは、動詞としては残されていないが⁴⁰、現在分詞由来のwīgendが残されており、ここではgが現れている。

þēonは強変化動詞第3種から第1種に移行した動詞であるが、古い第3種の変化形がまだ残っている。

1.7. 古フリジア語

古フリジア語において、germ. aiはāまたはēになるが⁴¹、強変化動詞第1種の過去単数語幹ではēの方が現れる。この音変化により、古フリジア語の強変化

³⁸ 語幹がfに終わっている場合、文法的交替は音韻法則的に消失する。

³⁹ sēonの過去分詞の幹母音については、以下を参照のこと。なお、sēonは、過去複数語幹を持った形態が残されていない。

⁴⁰ 古英語ではその代り、強変化動詞第5種の-weganが見られる。

⁴¹ どのような音環境においてどちらになったかは不明である。

動詞第1種のアプラウトはī-ē-i-iとなる⁴²。直説法現在2人称・3人称単数形で-st, -t(h)という語尾が付くと、幹母音が短母音化する。古フリジア語で強変化動詞第1種に属しようした母音の変化を示す動詞には、次のものがある。

bīda, bīta, blika, drīva, -drīta, glīda, grīpa, hnīga, klīva, -līva, lītha, -mītha, rīda, -rīva, rīsa, sīga, sīpa, skīna, skrīta, skrīva, skrīda, slīta, smīta, snītha, spīa, splīta, stīga, strīda, strīka, swīva, swīka, wīka, -wīta, wrīta

bīdaは不定詞の例が1例あるのみで、弱変化動詞第2種のbīdiaに取って代わられている。

līthaとskīnaには、弱変化動詞第1種の形も見られる。

古フリジア語の強変化動詞の過去分詞には、-a/aen-という接尾辞を持つ形に由来するものと-in-という接尾辞を持つ形に由来するものが混在しているが、strīkaの過去分詞-stritzenは-in-を持つ形に由来しており、語幹末子音が口蓋化している⁴³。

文法的交替については、līthaとsnīthaにおいて、th～dという交替が見られるが、snīthaでは過去分詞にthを持った形も見られる。strīda < germ. *streiþanでは文法的交替がd < germ. ðの方に、rīsaではsの方に統一されている。-mīthaは現在形しか用例が残されていないので、文法的交替については不明である。germ. *weihanは、動詞としては用いられておらず、名詞化した現在分詞に派生接尾辞のついたwīgandlikeが見られるのみであるが、gが現れている⁴⁴。なお、古西フリジア語では、母音間のthがdになるため、母音間ではgerm. þとgerm. dの間の文法的交替が消失することになる。母音間のd < th, dは、その後しばしば脱落するようになり、強変化動詞第1種でも、rīdaではdが残るものの、他の語幹がd < th, dで終わる動詞ではdの脱落が起こる。

古西フリジア語では、語幹末のvは母音間でwへと変化する。そしてこのwが先行母音に影響を及ぼし、新たなアプラウトのパターンが生み出されている。skrīvaを例に変化形を示すと、次のようになる。

scriuwa [skrjú:wa] – scrēf – scriouwen [skrjó:wen] – scriouwen

⁴² 過去複数語幹及び過去分詞の語幹では、iに代わりeが現れることもある。またsīaについては下記を参照のこと。

⁴³ strīka以外の語幹が軟口蓋音に終わる動詞については、過去分詞が残されておらず、口蓋化が起っていたかどうかは不明である。

⁴⁴ germ. fとgerm. bの交替は、強変化動詞第1種の語幹末では、両者が同音となってしまったため、消失している。

過去単数形には、類推により *sciou* という形態も形成される。

sīa < germ. **seihwan* は、直説法現在3人称単数形の *sīth* と過去分詞の *-sīn* が残されている。germ. *hw* は、古フリジア語では母音間で脱落するが、*sīth* は germ. *hw* が脱落した形態から類推的に形成されたものと考えられる。過去分詞の *-sīn* という形態は、文法的交替により生じた *g* が *-in-* という接尾辞の前で口蓋化により *j* になり、その後約音が起こり形成された可能性もあるが、文法的交替の平均化により過去分詞の語幹に入り込んだ *h* が母音間で脱落して形成された可能性もある。

germ. **etan* は、強変化動詞第5種であるが、過去単数語幹の幹母音が germ. *a* ではなく germ. *ē* である。古フリジア語でもこれが継承されているが、そのためアブラウトが強変化動詞第1種のそれに近くなっている。

ita – ēt – (用例無し) – iten

2.0. 各言語における歴史的変遷

1.1. から 1.7. まで、文献時代の初期の状態を眺めてみたが、次にここから各言語において語幹形成と語彙につき、どのような変化が起こったかを見ていくことにする。取り上げる言語は、アイスランド語、スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語、ドイツ語、低地ドイツ語、オランダ語、英語、西フリジア語とし、この順で見ていくこととする。概ね 1.2. から 1.7. で取り上げた順序と一致しているが、ノルウェー語については、*bokmål* におけるデンマーク語の強い影響を考え、デンマーク語の次に回している。なお、西ゲルマン語における直説法過去2人称単数形の形成法の変遷については、強変化動詞第1種固有の問題ではなく、強変化動詞全体の問題なので、本稿では取り扱わないこととする。

2.1. アイスランド語

古アイスランド語における *i* と *í* の対立は、近代アイスランド語では長短ではなく、張り母音 */i:/* 対弛み母音 */i/* という音色の対立となる。近代アイスランド語でも母音の長短の違いは存在するが、これは音素的な対立ではなく、古アイスランド語における長さがどうであれ、後ろに子音が複数続く時は短母音、そうでない時は長母音になる。古アイスランド語の *é* は、近代アイスランド語では *je/* となる。これらの変化により、古アイスランド語の *i – ei – í – i* というアブラウトは *i /i:/ ([i:] – ei /ei/ ([ei:, ei]) – i /i/ ([r:] – i /i/ ([r, i])* に、*i – é – í – i* というアブラウトは *i /i:/ ([i:] – é /je/ ([jɛ:, jɛ]) – i /i/ ([r:] – i /i/ ([r, i])* になる。ただし、幹母音の *i* の後に *gi* が続くと、幹母音の *i* は張り母音 */i:/* になる。なお、現代ゲルマン語の強変化動詞第1種で過去単数語幹と過去複数語幹の区別が残ってい

るのは、アイスランド語とフェーロー語のみである。他の言語では両者が融合し、単一の過去語幹を形成している。

現在、アイスランド語において強変化動詞第1種に属しているのは、次の動詞である。

bíða, bíta, drífa, dríta, gína, grípa, hníga, hrífa, hrína (kleben bleiben), hrína (schreien), hvína, klífa, klípa, kviða, líða, míga, ríða (reiten), rífa, rísa, síga, skína, skíta, skríða, slíta, sníða, stíga, svífast (zurückschrecken), svífa (schweben), svíkja, sviða, þrífa, víkja, líta, ríða (winden)

古アイスランド語において、語幹がgで終わる動詞の過去単数語幹で、本来的な-éという形のもとと並んで類推的な-eigという形のものが形成されたが、現在では-éという形のみはまれな形、あるいは古形となっており、-eigという形のものが通常の、あるいは唯一の形となっている。過去単数語幹においてéという幹母音が現れたのは、本来は語幹がgに終わる動詞のみであったが、éは類推的にvíkjaの過去単数語幹に入り込み、そしてvíkjaの場合、語幹がgに終わる動詞の場合とは逆に、vék-がより一般的な過去単数語幹になっている。

svíkjaとvíkjaにおいては、kの後にvが続く形態やw-ウムラウトを起こしている形態は姿を消しており、jを伴う形態のみが唯一の形態となっている。なお、kの後にjを伴う形態は、アイスランド語とフェーロー語にしか見られない。

古アイスランド語において強変化動詞第1種に属していた動詞の内、síðaは現在では失われている。blíkjaも、弱変化第2種のblíkaに取って代わられている。中低ドイツ語からblífaという動詞が借用され、一時期強変化動詞第1種として用いられていたが、これも現在では姿を消している。

古アイスランドにおいて、gína, hníga, líða, sníða, svífaには弱変化形が併存していたが、現在では弱変化形は消失しており、常に強変化形しか用いられていない。

físa, hníta, sveipaは、弱変化へ移行している。físaは弱変化第1種の変化も第2種の変化もする。hnítaは第1種の変化をする。sveipaには古アイスランド語の時代から弱変化第1種と第2種の変化が存在していたが、現在では第1種の変化は見られず、第2種の変化形のみとなっている。spýiaも、強変化形がまだ残ってはいるものの、普通弱変化第1種の変化をするようになっていく。また、rístiは弱変化動詞第1種のrístiに、rítaは弱変化動詞第2種のrítaに取って代わられている⁴⁵。

逆にklípa (< klýpa)は、弱変化動詞第1種から強変化動詞第1種に移行してい

⁴⁵ rístaもrítaも古アイスランド期から存在している。

る。kvíða も、現在形ははまだ弱変化動詞第1種の変化であるが、過去形と過去分詞は、強変化動詞第1種の変化形を示している。

bíða の過去分詞の幹母音は、古アイスランド語の e を引き継ぎ現在でも e /e/ ([e:]) であるが、一時期類推的に i /i/ ([i:]) も用いられていた。

古アイスランド語において残されていた、かつて存在していた強変化動詞第1種の痕跡は、その大半が失われている。現在まで残っているのは、hnipinn, visinn と tjá の直説法現在形で幹母音が é のもののみである⁴⁶。

2.2. スウェーデン語

近代スウェーデン語では、単一の過去語幹が形成される際、過去単数語幹の ē の方が統合された過去語幹の幹母音となった。過去分詞・完了分詞の語幹の母音は、唯一の例外である förtiga の過去分詞 förtegen を除き⁴⁷、長母音の i [i:] でそろえられた。これらの変化の結果、強変化動詞第1種のアプラウトは i [i:] – e [e:] – i [i:] となった。現代スウェーデン語の強変化動詞第1種は、次の通りである⁴⁸。

bita, driva, glida, gnida, gripa, niga, vina, kliva, knipa, kvida, bli, lida, pipa, rida, riva, skina, skita, skriva, skrika, skrida, slita, smita, sprida, stiga, strida, svika, svida, tiga, vika, vrida

古スウェーデン語で見られた語の内、rīsa, rīsta, splīta, strīka, trīna, vīta は失われている⁴⁹。逆に knipa, kvida, pipa, skrika, smita, sprida, tiga が、近代スウェーデン語に加わっている。この内、pipa はラテン語からの借用語である。knipa も中低ドイツ語からの借用語である可能性がある。

古スウェーデン語において強・弱両変化を示していた動詞の内、smida は弱変化動詞第1種に、bida と skria は弱変化動詞第2種になった。trivas は、古スウェーデン語では強変化形しか見られないが、現在では弱変化動詞第1種である。

germ. *sneipan は、アイスランド語では常に強変化となったが、スウェーデン

⁴⁶ tjá の直説法現在単数形は、té, tér, tétあるいは tjái, tjáir, tjáir である。

⁴⁷ förtegen の e については、Wessén (1970), 273 頁を参照のこと。なお、tiga の完了分詞は tigit である。

⁴⁸ スウェーデン語、デンマーク語、ノルウェー語については、Seebold (1970) あるいは de Vries (1977) あるいはこの両方にしか記載されておらず他で見つからなかった語は挙げていない。該当するのは次の語である：スウェーデン語 drita, fisa, miga, siga, sviva, sviga；デンマーク語 drite, mige, sigte, förvita；ノルウェー語 (bokmål) svine；ノルウェー語 (nynorsk) nige, nite。

⁴⁹ mīgha, sígha, swīgha については、註48を参照のこと。

語では弱変化動詞第2種に移行している (snida)。germ. *wreitan も弱変化動詞第2種(rita)となっているが、こちらはアイスランドも同様である。

kvida, sprida, strida には、強変化形と弱変化動詞第1種の変化形が混在している。どれも本来は弱変化動詞第1種だったものが、強変化形を併せ持つに至った動詞である。1.3. で述べたように、strida は既に古スウェーデン語において語形変化の揺れを示している。それぞれの語の変化形は次の通りである⁵⁰。

kvida – kved/kvidde – kvidit
sprida – spred – spritt/spridit – spridd
strida – stred/stridde – stridt/stritt – -striden

niga, skriva は、古スウェーデン語期には弱変化形も併存していたが、現在では常に強変化である。

tiga は、古スウェーデン語では弱変化動詞第3種(bighia)である。

2.3. デンマーク語

古デンマーク語でも古スウェーデン語と同じく、東ノルド語を特徴づける変化の一つである germ. ai > ē という変化が起こったため、アプラウトのパターンが i – ē – i – i となる。古デンマーク語の末期になると i がたいてい e となり、更に開音節の短母音の長母音化が起こる。過去形ではこのため、過去単数語幹と過去複数語幹の区別が失われることになる。これらの変化の結果、アプラウトのパターンは i [i:] – e [e:] – e [e:] となる。i の後に g [ɣ] が続く場合には、複数の発展の可能性があったが、強変化動詞第1種では、skrige 以外の動詞はこのパターンのアプラウトを行うようになる。現代デンマーク語でこのパターンのアプラウトを行う動詞には、次のものがある。

drive, fise, glide, gnide, gribe, hive, knibe, blive, lide (vergehen)⁵¹, pibe, ride, rive, skrive, skride, slibe, snige, stige, svige, svi⁵², svide, vige, vride

この内、glide, blive, slibe は中低ドイツ語からの借用語であり、gnide, knibe にもその可能性がある。pibe はラテン語からの、hive は近代英語からの借用語である。fise は弱変化動詞第1種及び第2種の変化もする。文法的交替は示さない。

⁵⁰ 不定詞、過去形、完了分詞、過去分詞の順。kvida については過去分詞が存在していないので、不定詞、過去形、完了分詞のみ挙げています。

⁵¹ デンマーク語では lide < germ. *leiþan は、意味により過去分詞が異なる。

⁵² svie の変化は、svie – sved – svedet/sviet である。

bliveにおいては、普通vは発音されない。stigeは、現在語幹と過去語幹でg [ɣ]が発音されないことがある。

svie (brennen)と svide (sengen)は本来同一の動詞である。母音間のd [ð]は脱落することがあったが⁵³、d [ð]が脱落した形とd [ð]が保持された形がそれぞれ別々の動詞に発達したのがsvieと svideである。

skrigeにおいては、iがeに変化した後、後続のgとともに二重母音eg [ai]を形成するに至っている⁵⁴。過去形の幹母音には、過去複数語幹の幹母音であったeg [ai]の方がなるが、これには過去分詞の幹母音の影響があったものと考えられる。

語幹がdに終わる強変化動詞第1種の内、次のものは過去分詞が-edetではなく -idtという形をしており、i [i:] - e [e:] - i [i]というアプラウトを示している。

bide, lide (vertrauen)⁵⁵, lide (leiden), skide, slide, smide, stride

過去分詞で短いiが保持されているのは、dt [d]の前ではiからeへの舌の位置の低下が阻害されたことと⁵⁶、閉音節のため長母音化が起らなかったことによる。-idtという形態の成立については、強変化動詞の内語幹がdで終わるものは、過去分詞中性形で接尾辞音節の母音が脱落することがあったが、これがこの-idtという形態の1つの源となっている⁵⁷。また、語幹がdに終わる強変化動詞第1種の中には、弱変化動詞第1種の変化もしたものがあり、これによっても -idtという形態が強変化動詞第1種の過去分詞に入り込んでいっている⁵⁸。類推的發展も加わり、かつては語幹がdに終わる強変化第1種のほとんどの動詞の過去分詞にも -edetと -idtの両形態が存在していたが、現在ではそれぞれの動詞に対しどちらか一方のみが残され、上記のような分布となっている。

bie, fnise, grine, vine, lide (vertrauen), lide (vergehen, leiden), pibe, skride, slibe, smile, stige, stride, svige, trives, trine, tvine, vigeにおいては、かつて強変化形と弱

⁵³ Hansen (1971), 283-284頁を参照のこと。

⁵⁴ Hansen (1962), 29頁及びHansen (1971), 378頁を参照のこと。

⁵⁵ lide (vertrauen)は lide (vergehen, leiden)とは別の動詞で、弱変化から移行した動詞であり、アイスランド語の hliða, スウェーデン語の litaに対応している。アイスランド語の hliðaは弱変化動詞第1種、スウェーデン語の litaは弱変化動詞第2種である。デンマーク語ではかつて弱変化第1種と第2種の両方の変化が見られた。

⁵⁶ Hansen (1962), 19頁を参照のこと。

⁵⁷ Skautrup (1944-1970), 2.bind, 55頁を参照のこと。

⁵⁸ Hansen (1962), 26-27頁を参照のこと。なお、Hansenは、この弱変化形からの發展のみを -idtという形態の起源としている。

変化形が混在していた⁵⁹。現在では, lide (vertrauen), lide (vergehen, leiden), pibe, skride, slibe, stige, stride, svige, vigeは弱変化形が消失し, 強変化形のみとなっている⁶⁰。逆に bie, fnise, grine, vine, smile, trives, trine, tvineは強変化形が失われ, 常に弱変化となっている。この内bie, trives, trine, tvineは弱変化動詞第2種であり⁶¹, fnise, grine, vine, smileは弱変化動詞第1種と第2種の両方の変化をしている。なお, grine, vine, trine, tvineが完全な弱変化動詞になったことにより, デンマーク語の強変化動詞第1種から語幹がnで終わるものが姿を消している。

アイスランド語やスウェーデン語と同様, risteは弱変化動詞第2種である。spyも弱変化動詞第2種である。

現在では失われてしまっているが, splidaという動詞は弱変化動詞第1種及び第2種の変化をしていた。古スウェーデン語の splītaとは異なり, 強変化形は残されていない。

かつて存在した中低ドイツ語からの借用語である kigeは, 強変化動詞第1種の変化を示していたが, 弱変化動詞第2種の kiggeに取って代わられている⁶²。germ. *skeinanもデンマーク語では見られず, 代わって弱変化動詞第2種の skinneが用いられている。

スウェーデン語の tigeは強変化動詞第1種であるが, デンマーク語の tieは強変化動詞第5種で, giveと同じパターンの変化をする (tie – tav – tiet)。しかしながらこの動詞は, この変化パターンにたどり着くまで過去形も過去分詞も様々な形態が形成されており, その中に teegという過去形が見られる⁶³。

2.4. ノルウェー語

ノルウェー語については, 文献により記述内容にかなりの相違があるが, 本稿では, bokmålについては, Holmes/Enger (2018)に基づいて語幹形成と語彙に関して述べた上で, Haugen (1974 [1965])の記述との違いをあげていくこととする⁶⁴。ただし, 強変化動詞第1種のグループ分けに関しては, Holmes/Enger (2018)には従わず, 筆者の視点で行う。nynorskについては, 専らHaugen (1974 [1965])に基づいて論じていくことにする。なお, 借用語については, スウェ

⁵⁹ かつて fline という動詞が存在しており, 過去形の flen が残されている。現在ではこの動詞は失われてしまっているが, ノルウェー語に残されており, 強・弱両変化を示している。ノルウェー語の fline の変化形については, 以下を参照のこと。

⁶⁰ もちろんこれは, -idt という形の過去分詞を除いて考えてのことである。

⁶¹ bie は, 強変化動詞だったものがまず弱変化動詞第1種の変化をするようになり, 後に弱変化動詞第2種に移り変わっている。

⁶² スウェーデン語の kika は弱変化動詞第2種である。

⁶³ Skautrup (1944-1970), 2.bind, 351 頁を参照のこと。

⁶⁴ 余りにも煩瑣になる恐れがあるため, あらゆる相違点を網羅的に記述しているわけではないことを, 予め断っておく。

ーデン語及びデンマーク語に関する記述を参照されたい。

bokmålにおいて強変化動詞第1種は、語幹形成の観点から2つのグループに分けられる。1つは、skri(de)以外の語幹がdに終わる動詞、drite以外の語幹がtに終わる動詞、語幹がnに終わる動詞、bliで、もう1つはこれら以外の動詞である。どちらのグループに属すにせよ、過去形の幹母音は、基本的にe [e:]である。このe [e:]は、過去単数語幹の幹母音に由来する西ノルド語的なeiで置き換えることもできる。動詞の中には、過去語幹の幹母音としてe [e:]を用いることができずeiを用いなければならないものもある。また、語幹がdに終わっている動詞では、現在語幹を用いた形態で-d(e)-が随意的、あるいは義務的に脱落する。過去形でも、ノルウェー語の一般的な音韻法則に従い、dは普通発音しない。

順序は逆になるが、後者のグループから先に述べていくと、これに属す動詞のアプラウトは、デンマーク語の強変化動詞第1種の大部分と同様に（もっとも過去語幹のeiを除いての話であるが）、i [i:] - e [e:] / ei - e [e:]である。このパターンのアプラウトを示す動詞には、次のものがある。

drive, drite, gripe, klive, knipe, pipe, rive, skrive, skri(de), skrike, snike, stige, svike, vike

kliveは過去形の幹母音がeiのみである。

Haugen (1974 [1965])の記述だと、以下の点で相違が見られる。

- ・上記の動詞の他に、fise, mige, sig, triveがこのグループに加わる。migeとtriveは方言的語彙である。
- ・kliveは、過去分詞が弱変化動詞第1種の形のklivdになり、このグループから外れる。
- ・triveは、過去形の幹母音がeiのみで、過去分詞には、trevetと並んで、弱変化動詞第1種の形のtrivdが併存している。
- ・snikeは、過去形の幹母音がeのみである。
- ・skriとskrideは変化形が別で、skriはskri - skrei - skridd、skrideはskride - skred - skredetと変化する。
- ・fiseは、強変化形と並んで弱変化動詞第1種の過去形、過去分詞が併存している(fise - feis/fes/fiste - feset/fist)⁶⁵。

次に前者のグループについて述べる。このグループは、過去分詞の幹母音がi [i]/[i:]であるという特徴を持っている。このグループにはskri(de)以外の語幹がdに終わる動詞、drite以外の語幹がtに終わる動詞が含まれているが、これ

⁶⁵ ここに示したように、強変化の時、文法的交替は行われない。

らはデンマーク語において語幹がdに終わる動詞の半数がそうであったように、過去分詞の幹母音がi [i]である。語幹がdに終わるものは過去分詞が-idd, 語幹がtに終わるものは過去分詞が-ittとなる。具体的には、次の動詞がこれに当たる。

bite, gli, gni, bli, li(de), ri(de), skite, slite, stri(de), svi, vri

li(de)には、liddという過去分詞と並んでlidtという過去分詞が併存している。

デンマーク語では、語幹がdで終わる動詞は、過去分詞の幹母音がe [e:]のものとい [i]のものが半々であったが、bokmålでは、語幹がd, tで終わる動詞はほとんど過去分詞の幹母音がi [i]である。

Haugen (1974 [1965])の記述だと、次のような相違が見られる。

- ・上記の動詞の他、skli, skri, liteが加わる (skriについては上記を参照のこと)。
- ・gni, skli, stri(de), svi, vriにおいては、過去形に弱変形(-idde)が併存している。
- ・skiteとskliの強変化過去形の幹母音はeiのみである。

デンマーク語と異なり、bokmålの強変化動詞第1種には、語幹がnに終わるものがある。

grine, hvine, kvine, skinne

これらの動詞は、過去分詞として弱変化動詞第1種の形態(-int)が用いられる。skinneの現在語幹は、デンマーク語と同じくskinn-という形態をしている。また、skinneの過去形の幹母音はeiのみである。

Haugen (1974 [1965])に見られる相違点は、次の通りである。

- ・語幹がnに終わる動詞には、更にflineとtrineがある。
- ・fline, grine, hvine, kvine, skinne, trineにおいては、過去形に弱変化形(-inte)が併存している。
- ・fline, kvineは強変化過去形の幹母音がeiのみ、hvine, trineはeのみである。

bliの変化はbli – ble – blittであり、vはどの形態にも現れない。Haugen (1974 [1965])は、bliは「海で溺死する」という意味の時、bli(ve) – bleiv – blittという変化をするとしている。

Haugen (1974 [1965])では、語幹がvで終わる動詞の内、hive, klive, sviveも過去分詞が弱変化動詞第1種の形態を取るとされている。kliveについては上記を参照のこと。hiveとsviveはHolmes/Enger (2018)では記載されていない。

tieは強変化に移行しておらず、tie – tidde/tagde – tidd/tagdと弱変化を示して

いる。risteはアイスランド語、スウェーデン語、デンマーク語と同様、弱変化動詞第2種である。方言的な語彙のriteも弱変化動詞第2種で、アイスランド語、スウェーデン語と共通している。spyも弱変化である(spy – spydde – spydd)。

nynorskでは、過去形の幹母音が単数形のeiの方で統一され、過去分詞で開音節における短母音の長母音化が起こったため、アプラウトのパターンはi [i:] – ei – i [i:]となる。このアプラウトを行う動詞には次のものがある。

bide, bita, drive, drite, fise, fline, gli(de), gni(de), grine, gripe, hive, rine (einwirken), rine (schreien), kvine, kike, klive, klippe, knipe, (bli), li(de), (mige), pipe, ri(de), rive, rise, sive, sigde, skine, skite, skli(de), skrive, skrike, skri(de), slite, smite, snide, stige, stri(de), svive, svike, svi(de), trive, vike, lite, vri(de)

migeは方言的語彙である。

fiseもriseも、文法的交替は行わない。

語幹がdに終わる動詞の内、gli(de), gni(de), li(de), ri(de), skli(de), stri(de), svi(de), vri(de)は、過去分詞に強変化形と並んで弱変化形(-idd)が存在する。またこの内、gni(de), skli(de), stri(de), svi(de)には、過去形にも弱変化形(-idde)が存在している。語幹がvで終わる動詞でも、hiveとsiveは強変化と弱変化動詞第1種の変化の両方を示している⁶⁶。

bliはbli – blei – blittという変化であり、「海で溺死する」という意味の時のみbli(ve) – bleiv – bliveである。

teieは強変化に移行しておらず弱変化のままで、teie – tagde – tagdと変化する。blikeは、アイスランド語と同様、弱変化動詞第2種である。risteは弱変化第1種と第2種の両方の変化を示している。方言的な語彙のriteは、アイスランド語、スウェーデン語、bokmålと同様、弱変化動詞第2種である。spyも弱変化で、変化形はbokmålと同じである。

続く

⁶⁶ siveはbokmålとデンマーク語では弱変化動詞第2種である。

参考文献

(『ゲルマン語強変化動詞第1種の歴史の変遷 (1)』で用いたもののみ。
また, Haugen (1974 [1965]) 以外の現代語辞典は省略。)

- Allan, Robin and Philip Holmes and Tom Lundskaer-Nielsen 1995: Danish, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
- Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller ¹¹1991: An Anglo-Saxon dictionary, Oxford University Press.
- Boutkan, Dirk and Sjoerd Michiel Siebinga 2005: Old Frisian etymological dictionary, Leiden.
- Braune, Wilhelm ¹⁵2004: Althochdeutsche Grammatik 1. Laut- und Formenlehre, bearb. von Ingo Reiffenstein, Tübingen.
- ²⁰2004: Gotische Grammatik, neu bearbeitet von Frank Heidermanns, Tübingen.
- Bremmer Jr., Rolf H. 2009: An introduction to Old Frisian, Amsterdam/Philadelphia.
- Brunner, Karl ³1965: Altenglische Grammatik, Tübingen.
- Campbell, Alistair 2003 [³1968]: Old English grammar, Oxford.
- Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson 1993 [²1957]: An Icelandic-English dictionary, second edition with a supplement by William A. Craigie, Oxford.
- Cordes, Gerhard 1973: Altniederdeutsches Elementarbuch, mit einem Kapitel „Syntaktisches“ von Ferdinand Holthausen, Heidelberg.
- Duden Bd. 7, das Herkunftswörterbuch, 5. neu bearbeitete Auflage, 2013 Berlin/Mannheim/Zürich.
- Einarsson, Stefán 1973: Icelandic, Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press.
- Feist, Sigmund ³1939: Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache, mit Einschluß des Krimgotischen und sonstiger zerstreuter Überreste des Gotischen, Leiden.
- Gallée, Johan Hendrik ³1993: Altsächsische Grammatik, Tübingen.
- Grosse, Rudolf (Hrg.) 2007: Althochdeutsches Wörterbuch, Reprint der Bände I-IV, Berlin.
- Gutenbrunner, Siegfried 1951: Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen, Heidelberg.
- Hansen, Aage 1962: Den lydligge udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden, 1. vokalismen, København.
- Hansen, Aage 1971: Den lydligge udvikling i dansk, fra ca. 1300 til nutiden, 2. konsonantismen, København.
- Haugen, Einar 1974 [1965]: Norsk engelsk ordbok, nytt amerikansk opplag med tillegg

- og rettelsler, University of Wisconsin press.
- 1982: Scandinavian language structures, a comparative historical survey, Tübingen.
- Heusler, Andreas ⁷1967: Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg.
- Hirt, Hermann 1931: Handbuch des Urgermanischen, Teil I, Laut- und Akzentlehre, Heidelberg.
- Hirt, Hermann 1932: Handbuch des Urgermanischen, Teil II, Stammbildungs- und Flexionslehre, Heidelberg.
- Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: Altfriesisches Handwörterbuch, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
- Holmes, Philip and Hans-Olav Enger 2018: Norwegian, a comprehensive grammar, London and New York, Routledge.
- Holmes, Philip and Ian Hinchliffe 2003: Swedish, a comprehensive grammar, second edition, London and New York, Routledge.
- Holthausen, Ferdinand ³1974: Altenglisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg.
- Holthausen, Ferdinand u. Dietrich Hofmann 1985: Altfriesisches Wörterbuch, zweite, verbesserte Auflage, Heidelberg.
- Kluge, Friedrich ²⁴2002: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache, bearbeitet von Elmar Seebold, Berlin/New York.
- Köbler, Gerhard 1989: Gotisches Wörterbuch, Leiden.
- 1993: Wörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes, Paderborn.
- König, Ekkehard and Johan van der Auwera (Ed.) 1994: The Germnic lanuages, London and New York, Routledge.
- Krahe, Hans ²1967: Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen, bearbeitet von Elmar Seebold, Heidelberg.
- ⁷1969a: Germanische Sprachwissenschaft I, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
 - ⁷1969b: Germanische Sprachwissenschaft II, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- Krause, Wolfgang ³1968: Handbuch des Gotischen, München.
- Kress, Bruno 1982: Isländische Grammatik, Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie (Lizenz Ausgabe des Max Hueber Verlages, München).
- Lasch, Agathe 1974: Mittelniederdeutsche Grammatik, 2., unveränderte Auflage, Tübingen.
- Lehmann, Winfred P. 1986: A Gothic etymological dictionary, Leiden.
- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson 2001: A guide to Old English, sixth edition, Blackwell Publishing.
- Mottausch, Karl-Heinz 1998: Die reduplizierenden Verben im Nord- und Westgermanischen, Versuch eines Raum-Zeitmodells, in: NOWELE 33, S. 43-91, John Benjamins Publishing Company.

- Mossé, Fernand 1969 [²1956]: Manuel de la langue gotique, Paris.
- Noreen, Adolf 1904: Altnordische Grammatik II, Altschwedische Grammatik, mit Einschluß des Altgutnischen, Halle.
- ⁵1970: Altnordische Grammatik I, Tübingen.
- Pétursson, Magnús 1978: Isländisch, Hamburg, Helmut Buske Verlag.
- Pfeifer, Wolfgang et al. 1989: Etymologisches Wörterbuch des Deutschen, Berlin.
- Prokosch, Eduard 1939: A comparative Germanic grammar, Linguistic society of America.
- Ranke, Friedrich u. Dietrich Hofmann ⁴1979: Altnordisches Elementarbuch, Berlin/New York.
- Ringe, Don 2006: From Proto-Indo-European to Proto-Germanic (A linguistic history of English, volume I), Oxford University Press.
- Ringe, Don and Ann Taylor 2014: The development of Old English (A linguistic history of English, volume II), Oxford University Press.
- Schützeichel, Rudolf 2006: Althochdeutsches Wörterbuch, 6., Auflage, überarbeitet und um die Glossen erweitert, Tübingen.
- Seebold, Elmar 1970: Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben, The Hague.
- Sehr, Edward H. 1966: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.
- Seip, Didrik A. 2012 [1971]: Norwegische Sprachgeschichte, bearbeitet und erweitert von Laurits Saltveit, Berlin/New York.
- Sjölin, Bo 1969: Einführung in das Friesische, Stuttgart.
- Skautrup, Peter 1968 [1944]-1970: Det danske sprogs historie, 5 bind, Gyldendalske boghandel, Nordisk forlag.
- Splett, Jochen 1993: Althochdeutsches Wörterbuch, 2 Bde., Berlin/New York.
- Streitberg, Wilhelm ⁴1974: Urgermanische Grammatik, Heidelberg.
- 2000a: Die gotische Bibel, Band 1, der gotische Text und seine griechische Vorlage, 7. Auflage, Heidelberg.
- 2000b: Die gotische Bibel, Band 2, Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch, 6. Auflage, Heidelberg.
- de Tollenaere, Felicien and Randall L. Jones 1976: Word-indices and word-lists to the Gothic bible and minor fragments, Leiden.
- de Vries, Jan 1977: Altnordisches etymologisches Wörterbuch, Leiden.
- Wessén, Elias 2012 [1968]: Die nordischen Sprachen, Berlin.
- 2012 [1970]: Schwedische Sprachgeschichte, Band 1, Berlin.
- Wright, Joseph 1981 [1910]: Grammar of the Gothic language, second edition with a

supplement to the grammar by O. L. Sayce, Oxford University Press.
Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1984 [1925]: Old English grammar, third
edition, Oxford University Press.

